



江戸時代から久居城下に響く と き 子午の鐘

6月10日は「時の記念日」。天智
天皇10年の4月25日に漏刻と呼ば



れた水時計が設置され、宮中に時が知らされるようになったことを記念したものである。この日を太陽暦に直すと671年の6月10日に当たるため、大正9(1920)年に時の記念日が制定された。

市の文化財に指定されている「子午の鐘」は、現在は年に2回(時の記念日と大みそか)、久居の町にその音を響かせている。

この鐘は、江戸時代の元文元(1736)年に久居城下に時を知らせるために作られた。作者は、津藩の鋳物師として有名な辻種茂である。

もともと久居陣屋の範囲内にあったこの鐘は、寛政元(1789)年に現在の久居幸町に移され、火事の警報に使用された。しかし、時を知らせる陣屋内の太鼓が遠くまで聞こえないこともあり、町の人たちは、奉行所へ鐘の復活を願い出、そのかいあって8年後には再び時を知らせる鐘として使われるようになった。

太平洋戦争中には陸軍に供出されたものの幸い溶解を免れ、終戦後に旧津市内に放置された鐘を久居幸町の長老が見つめ、無事戻されたといわれる。また、伊勢湾台風の時には鐘楼と共に崩れて鐘も落下するなど、数々の危機を乗り越え、今に至っている。

年2回行われる鐘打ち行事には、地元久居幸町の人たちをはじめ多くの人が集い、地域の恒例行事としてしっかりと定着している。

(「広報津」平成19年6月1日号)



地域の人たちの手で守られる「子午の鐘」